

〈論文〉

# 「蒙疆政権」におけるモンゴル人の歴史教育の志向性

—『蒙古國史』を中心に—

何 広梅

## 一 はじめに

モンゴリア南部、俗に言う内モンゴルは1945年8月に第二次世界大戦が終了するまでは日本の植民地か、ないしはその影響下にあった。東の満洲国（1932－1945）、とその西隣のモンゴル自治邦である。モンゴル自治邦は1941年8月4日に誕生するまでモンゴル軍政府（1936年5月）、モンゴル聯盟自治政府（1937年10月）、モンゴル聯合自治政府（1939年9月）と名称を変えた。その中で満洲国は日本の植民地だったが、モンゴル自治邦は日本人のコントロール下に置かれていた<sup>1</sup>。モンゴル自治邦は当時日本では「蒙疆」と呼ばれ、徳王をはじめとするモンゴル人官僚を中心とした対日協力政権だった。北は外蒙古、東は満洲国、西は寧夏省、南は陝西、山西、河北の三省に接する地域のことである。その面積は五十万七千平方キロメートルで、総人口は550万人と言われ、中でモンゴル人は30万人、回民は10万人と推定された。本稿では日本の植民地的性格を表す地域概念と時期を指す言葉として「蒙疆政権」<sup>2</sup>（以下、蒙疆政権と略す）を使用し、必要に応じて蒙古聯合自治政府なども用いる。



図① 蒙疆政権略図。注：楊海英『最後の馬賊：「帝国」日本の将軍・李守信』、講談社、2018年8月。

財団法人善隣協会（1933-1947）（以下、善隣協会と略す）は帝国日本の植民地支配期に活躍し、中国の辺境地域、特に蒙疆政權におけるモンゴル人や回民の文化向上を図ることを目的として、彼らに教育・医療・牧畜指導の施策を展開した民間団体である<sup>3</sup>。近隣民族の植民地化と日蒙親善の複雑な使命を背負って設立された善隣協会は次の事業内容を掲げた<sup>4</sup>。①蒙古民族の現状に鑑み主として蒙古各地に文化的施設を行う、②蒙古の産業開発を助成しこれが通商の促進を図る、③相互事業の紹介宣伝、④付属研究所並びに図書館の経営、⑤蒙古留学生の指導援助、⑥比隣諸邦の文化産業の開発指導に従事する人材を養成する学校の経営、⑦蒙古に関する調査、研究の発表、⑧診療所の開設並びに巡回診療の実施、⑨蒙古人子弟の教育、⑩蒙古の資源及び物資の調査⑪その他本会の目的達成に必要と認める事業にして理事会の議決を経たる事項である。その内容を遂行するため、善隣協会は大きく東京本部、新京事務局、内蒙古支部などを設立し<sup>5</sup>、内モンゴル支部の各班に教師、医師、獣医、モンゴル語および中国語が堪能な調査員や通訳を配して、モンゴル人のための診療所、模範牧場、小学校を開設していた。

『蒙古國史』は1937年2月25日に善隣協会より出版されたものである。本の凡例には「財団法人善隣協会ノ経営ニ係ル在蒙各地学校教科書トシテ編纂セルモノ」で、「蒙古人学生ニ日本語ヲ習熟セシムル旁ラ、蒙古民族史ヲ理解セシメ、以テ民族精神ノ発揚ニ資セシムルコトヲ主眼トシタ」と書かれていた。目次から終わりまで全部で156頁にわたり、16章から構成された。1941年2月25日にモンゴル語版も善隣協会より出版され、当時のモンゴル人の歴史認識に多大な影響を与えた教科書だったと考えられる。歴史教育がその対象とする民族や国家に所属する人々の自己認識の形成に一役買うものならば当時作成された歴史教科書等はそれを知る有効な素材になり得るであろう<sup>6</sup>。本稿では『蒙古國史』を中心に、その内容を正確に把握し、当時の状況において本教科書が何を志向したかを明らかにすることを試みるものである。

## 二 蒙疆政權におけるモンゴル人歴史教育の始まり

### （一）蒙疆の特殊使命と教育方針

日本に対する蒙疆の特殊使命はどこにあったのだろうか。1940年4月15日現在の「蒙疆建設の基本原則と其現況」<sup>7</sup>では次のように位置づけしていた。

「蒙疆は北外蒙古を介して蘇領に接し西北赤色「ルート」に直面し南支那本部に境しあり而して外蒙古の帰趨は宿命的日蘇関係の大勢を決するに足るものあり又支那本部赤化の為第一蘇支交通路たる西北赤色「ルート」は蒙疆の發展並勢力西進に依り之遮断を企図するを得べし。支那本部より見るときは蒙疆を以て一つの辺境地域として之を輕視せられ勝ちなるも蘇支軍事、政治、經濟的連絡を遮断し支那本部の治安の確立に貢献し得るのみならず北支に対する重要なる農産物資の供給地なることは固より贅言を要せず又蒙疆地区は古来より稀に見る民族闘争の地にして現在尚複雑なる民族的分布並歴史的關係を有し之れを調整統合し克く一致結合せしむるは蒙疆の特殊使命達成の為の欠くべからざる緊要事項なり。

蒙疆資源の開発は蒙疆の特殊使命達成の財政的基礎を為すと共に帝国の国防資源を充足するに足るものあり。

由来蒙疆は辺境の地として支那内外より軽視せられ支那本部繁栄の爲めにのみ利用せられたる結果文化は進まず人民は繁栄せず離反常なり爲めに支那統治の癌腫たりしが今や帝国政府に於いては支那本部と辺境地方に対する政策を判然区別するの基礎を確立せられたるは同慶とする所なり。また蒙疆地方は概ね内長城線以北とせられ地形上北支と政治的分離を許すのみならず第三國權益殆んど皆無なるが故に諸政策の推進他の地域に比し極めて容易なり」

このように位置づけた上、蒙疆建設の根本方針を「速に聖戦の目的を達成すると共に将来の国際転機に備えて萬遺算なきを期するため、(イ) 蒙疆の安定統合を促進し民生を向上し民族を協和し茲防共の鉄壁を確立す (ロ) 対蘇軍事の要請を基本と為し茲に○ (現文のまま) 国境地帯を建設す (ハ) 外蒙人竝に西北回民の把握収攬を目的とし茲對外○現文のまま」基地を設定す (二) 産業を開発して帝国総動員的要望に応ずると共に前諸項の施策に即応す」とし、政治、経済、産業、交通、思想、宗教等蒙疆一切の施策は前項根本方針に則り運営するものとした。

蒙疆政権における教育政策は前項根本方針に基づき、次のような教育綱領を掲げた。

その基本方針は「蒙疆政権創立ノ本旨ニ基ヅキ防共民族協和ノ精神及東洋道義ノ精華ヲ発揚シテ徳性ヲ陶冶シ、實際的技能ヲ授ケ以テ堅実ナル人材ヲ養成ス」とした。具体的には以下の 10 項目の要綱が示された<sup>8</sup>。

共産抗日思想を根絶し東方精神を昂揚す。

労作教育を重んじ勤労の気風を作与す。

初等教育に重点を置き中等教育は実業教育を主眼とし、高等教育は将来機を見て所用の設置を為し之を行わんとす。

日本語を普及す。

体育を奨励して健全なる精神を涵養す。

一般青少年を指導訓練して質実剛健の気風を振作す。

女子教育は婦徳の涵養と実務的訓練を主眼とす。

学校は官公立を原則とし社会と緊密なる連繫を保ち教化の中核たらしむ。

教育は實際的方法に依り民度及地方の実状に即応せしむ。

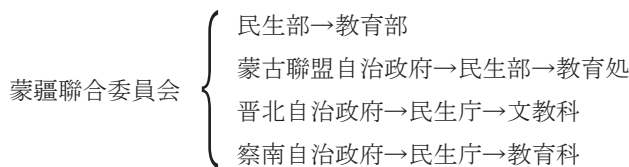
教師の養成及検定は政府之を行う。

しかし、その実行に当たって、教育行政機構の未充実や人材不足などの原因によって、蒙疆の教育行政は満洲よりの移入、暫行的に満洲国の教科書の審定採用など日本と満洲国の指導や技術的な援助が必要であった。

## (二) 蒙疆政権におけるモンゴル人向け学校教育制度の形成

蒙疆は察南、晋北、蒙古聯盟の三自治政府から構成され、この三自治政府の指導統制を図るため、日本は 1937 年 11 月 22 日に蒙疆聯合委員会を設立した。蒙疆聯合委員会設定に関する協定第 1 条には「各政権ニ相関聯シテ影響甚大ナル産業金融交通其ノ他必要ナル重大事項ノ処理ニ関シ各政権ノ有

スル権能ノ一部ヲ委譲セラルルモノトス」とした。設立当初、蒙疆聯合委員会は総務、産業、金融、交通の四つの部門から構成されていたが、1938年7月19日の蒙疆聯合委員会の機構改組によって、民生部と保安部が新しく設立された。これにより、「官心安定を第一」に各自治政府に委ねていた教育行政を蒙疆聯合委員会の民生部の管轄統制下に置き、教育の中央集権化が図られていた。しかし、蒙疆聯合委員会は殆ど総括的な立法機関にして執行機関としての力は弱く、従って行政機構も各自治政府夫々独自のものだった。教育行政に関しては蒙疆聯合委員会の民生部に教育部を置き、三自治政府内の民生部か民生庁が教育行政を担うことになっていた。立法機関として三自治政府より代表を集めて成立する教育審議会があったが、地方行政には各市公署、盟公署内の民生部、教育股がその管轄を行っていた。組織図は以下のものである。



モンゴル人の教育行政に関して、蒙古聯盟自治政府政務院民政部教育処が1939年に発行した『教育要覧』がある。『教育要覧』には徳王を中心とする対日協力政權の成立から1939年10月までのモンゴル人の教育事情が記されていた。その第10項目の附録には研究中の法規として蒙古聯盟自治政府の教育方針、学校体系、普通小学令などが示されていた。あくまでも検討中の法規であったが、当時の教育事情を知る上では欠かせない重要な資料である。学校体系解説、総解説第1条によると、蒙古聯盟自治政府における学校体系図は表①のように初等教育、中等教育、高等教育の三段階に分けられていた。児童の心身の発達に応じ、6-12才を初等教育段、12-18才を中等教育段、18-24才を高等教育段とした。初等教育について、その第4条では普通小学校の在学年限は4年、高等小学校在学年限は2年とした。そして、第8条では義務教育年限を4年と定め、第9条では普通小学修了後即ち義務教育は終了すとした。中等教育は中学校及び高等中学校、師範学校、実業学校に分けられ、在学年限はそれぞれ3年とされた。このように蒙疆政權におけるモンゴル人に対する学校教育制度は4年制義務教育を前提としていた。

このような構想の中で高等小学校第一学年から歴史教育が始まることになっていた。普通小学校令第10条では、専らモンゴル人児童を收容する普通小学校の教科目は修身、蒙文、日語、算術、常識、作業、音楽、体育と定められ、歴史の科目は課せなかったことがわかる。それに対し、高等小学校令第10条では修身、蒙文、日語、算術、史地、理科、畜産、作業、音楽、体育の順に史地、理科が新しく加えられた。高等小学校以降の中学校令、蒙古青年学校令、師範学校規程には歴史の教科目がすべて設置されていた。師範学校規程第8条によると、歴史教育は歴史上の重要事績を教え、社会の変遷や文化の発展過程への理解に努め、政府創設の本義及親日防共の確実な觀念の育成を宗旨とし、新政府





### 三 歴史教科書としての『蒙古國史』

蒙疆政権ではモンゴル人に4年制義務教育を施し、歴史教育は義務教育完了後の高等小学校第一学年から始まることになっていた。防共、民族協和、東洋道義の発揚を標榜した日本のモンゴル人に対する歴史教育は何を志向していたのだろうか。本節では近代モンゴル人の歴史認識に深く影響を与えたと思われる『蒙古國史』という歴史教科書を中心に検討してみることにする。

『蒙古國史』は1937年2月25日に善隣協会より出版された。1941年2月25日にモンゴル語バージョンも出版された。善隣協会の経営にかかる蒙疆各地学校教科書として編纂されたものと本の凡例に書いてあった。しかし、蒙疆政権における善隣協会経営のモンゴル人教育事業は規模が小さく、戦況や占領戦略の変更に伴い、常に変わっていた。1935年10月に錫盟第一小学校が開校して以来<sup>10</sup>、戦況により閉校を余儀なくされたり、校舎を移転したり、1939年9月以降順次現地政府移管となったりしていた。にもかかわらず、1941年2月に『蒙古國史』のモンゴル語バージョンが出版されたことの意義は大きいと考える。

表① 善隣協会経営の内蒙古における小学校統計表

	学校名	開校年月	備考	出典
1	徳化模範小学校	1937年8月	多倫から移設、政府移管	①
2	アバガ小学校	1936年	一学年40名、二学年40名、1936年7月40名で修学旅行、政府移管	②
3	西スニト王府小学校	1936年9月	一学年30名	
4	百霊廟小学校	1936年秋	1936年秋に開校し、戦況の悪化で閉校1939年1月再び開校。政府移管	②
5	貝子廟小学校		政府移管	
6	錫盟第一小学校		1935年10月15日開校34名、政府移管	③
7	郡王府小学校		1939年3月経営中	④
8	阿拉善小学校		1939年3月経営中	④
9	額濟納小学校		1939年3月経営中	④

注：①財団法人善隣協会昭和12年度報告書②昭和11年度内蒙支部予算内訳明細書③『善隣協会史—内蒙古における文化活動』④「財団法人善隣協会昭和14年度事業企画書」昭和13年7月。

\*空白は調査中

『蒙古國史』は善隣協会経営の現地学校の教材のみだった可能性が極めて低く、むしろ、全ての「蒙古人学生ニ日本語ヲ習熟セシムル旁ラ、蒙古民族史ヲ理解セシメ、以テ民族精神ノ発揚ニ資セシムルコトヲ主眼トシタ」ことが重視されたと思われる。なぜならば、その教授内容がモンゴル人の民族意識の発揚に深く結びついていたからである。以下では『蒙古國史』に書かれた内容を詳しく分析することによって、日本のモンゴル人に対する歴史教育が何を志向していたかを検討する。

『蒙古國史』はモンゴルの古代から近現代の歴史を包括していた。全16章から構成され、目次及び各章が占める頁数は次のようになっていた。

表② 『蒙古國史』の目次

章	目次	頁数
第1章	フヌの強大	1－12（12 頁）
第2章	センビ及びゼンゼンの活動	13－19（7 頁）
第3章	キタイの強大	20－30（11 頁）
第4章	モンゴル部の興起	31－39（9 頁）
第5章	チンギス・カン of 外国征伐	40－54（15 頁）
第6章	ウゲディの大遠征	55－67（13 頁）
第7章	ムングの功業	68－79（11 頁）
第8章	クビライの時代	80－91（12 頁）
第9章	元の衰微	92－97（6 頁）
第10章	モンゴル四カン國の盛衰	98－107（9 頁）
第11章	英雄チムールの大事業	109－117（8 頁）
第12章	モンゴルと明國	118－130（13 頁）
第13章	モンゴルと清國	131－138（8 頁）
第14章	支那人の蒙古移住	139－144（6 頁）
第15章	ロシアの野心	145－150（6 頁）
第16章	モンゴル民族の覚悟	151－155（5 頁）

その中で第1章は東アジアの諸民族、モンゴル民族、フヌの南下、万里の長城、バハツールゼンウ、バハツール大いに漢を破る、フヌの強大、フヌの北進、フヌの分裂、その後の活躍、モンゴル民族の名誉といった11項目の内容から構成された。その始まりの文章は次のようなものだった。

昔から東アジアに國を立てて活動した主たる民族はモンゴル族、マンジウ族、テュルク族、漢族（支那人）の四つであった。その内モンゴル、マンジウ族、テュルク族の三民族は北方に起り、相次いで強大な國を建てて南の漢民族の國と争い、たえずその地に侵入して苦しめ、時には之を滅して支那の地を占領したこともあった。しかし、北方民族の根拠地が全く漢民族によって奪われたことは今まで一度もなかったのである。

北方三民族のうちで最も強く、かつその名の世界にひびきわたったのはわがモンゴル民族である。（中略）我が民族は初めからモンゴルと呼ばれていたのではない。モンゴルというのは、初めは我が民族のうちの一部族の名にすぎなかったが、この部族より有名な英雄チンギス・カンが現れ、諸民族を従え、遂に東西にわたる大帝國を建てて以来、モンゴルが我が民族全体の名となったのである。

モンゴルの由来を始め東アジアの諸民族と支那との關係を中心に、「北方民族の根拠地が全く漢民族によって奪われたことは今まで一度もなかった」という少数民族と漢民族の対立構想の中で強い少数民族像を描き出そうとしていた意図が読み取れる。それは当時のモンゴル人ナショナリズムとしての反漢意識を利用し、漢民族を牽制する日本の民族分断政策によるものだったと考える。

第1章ではフヌを中心、フヌと漢人との戦いを戦国時代から遡り、「我がモンゴル民族の祖先であるフヌがアジアにおいてもヨーロッパにおいても大活躍をしたことは我々モンゴル民族にとって非常な名誉である」とした。その中で「フヌは文学を知ってはいなかったが、武力には非常に優れていた。フヌの子供達はやっと歩くことができるようになった頃より馬の乗り方や弓矢の使い方を教わり、日夜強い武人にならうと努力したのであるから戦争に強いのも当然であった」という日本のモンゴル人観があらわれていた。また、「始皇帝はフヌを防ぐために非常に苦心し、万里の長城を作って支那を守ることとした」とモンゴル人の昔の強さをイメージできるように万里の長城という実物で説明し、それをモンゴル民族の名誉であると位置付けていた。

第2章と第3章においては主にモンゴル民族が統一されるまでのモンゴル各部の盛衰史をまとめている。例えば、タムガツ部は西暦439年に北支那を統一し北魏の国を建て、漢人の国東晋を南に押さえつけ、モンゴル民族が支那の内地に大帝国を作ったのはこれが最初であるとした。また、タムガツ部は北魏の国を建てた頃はすでに遊牧の生活をやめて農業を行い、都も北支那の中心地に移し、支那文明を取り入れ、衣服や言葉も支那のものを使わせ、その他政治も宗教も全て支那風にした。そのため、センピは非常な文明国民となったが、祖先が北方の沙漠の中で養って来た勇壮な気風は次第に失われ弱くなり、遂に535年に国は東西に2分し、まもなく亡されたという。彼等が漢人文明に溺れたことはまことに悲しい結果になったと結論した。当時、大量の漢人の移住により、モンゴル人の漢化が進み、漢人に同化されることを民族の危機として多くのモンゴル人は認識していた。このような現実の民族の危機を、『蒙古國史』においてはセンピ民族の事例で分かりやすく説明し、漢人文明に溺れることの恐ろしさを強調した。現実の民族の危機を歴史的な現象で解釈することにより、多くのモンゴル人の共感を得ようとしたと考える。

また、漢人文明に溺れなかった良い例として内モンゴル東部のシラ・ムーレン附近に住んでいたキタイ族のアボキという人物をあげて解説していた。

「アボキはキタイの優れた所はどこまでも失わないようにと考えたのである。支那文明に溺れてキタイの長所を失えばキタイの国は滅亡するであろうということをよく知っていた。だから、彼は支那語を知っていてもこれを使わずどこまでもキタイの言葉を使い国民が自分の国のよい所を忘れないように努めたのである。文字は今までキタイになかったが、彼は漢字を使わず、別にキタイ文字を作らせて国民の漢化を防いだ。その昔北魏の皇帝が進んで支那文明を取り入れ、漢化した結果国が早く滅んだに比べてアボキはまことに優れた君主であると言わねばならぬ。

優れた君主とは漢字を使わず、国民の漢化を防ぎ、自分の良いところを忘れないように努めることであるとした内容が、王公貴族を始め、モンゴル人読者に自分ならどうするべきかを深く考えさせる事例であったと思われる。

第4章から第12章までの内容は、主にチンギス・カンがモンゴル統一を果たして以来、その子孫がアジア、ヨーロッパなどの国々を征伐し、人類の歴史上前後に比べもののない大帝国を作り上げたことを中心に清朝に至るまでのモンゴル民族の盛衰史を概観した。その中でチンギス・カンのことを「神の如きチンギス・カン」と位置づけ、次のように評価した。



「チンギス・カンの一生は実に奮闘努力の四字につきる。いかなる辛苦にも屈せず、モンゴルの名誉のために戦い、征服した敵の数は百に近く、沙漠の一小部族にすぎなかったモンゴルも今や世界最大の強国となった。こんな大事業を短い一生に成し遂げた人は歴史始まって以来チンギス・カンの外には一人もない。この不世出の大英雄を祖先とすることは我々の非常な名誉と言わねばならぬ。チンギス・カンのえらかったのは戦争に強いだけではない。父や母の教をよく守り、常にモンゴルのために努力を続け、その上国民を心から愛し、部下の将兵をいたわったことなど何も我等の手本とするに足るところである。

蒙疆政権において、モンゴル人のチンギス・カン崇拜という社会現象が一般化されたと言われている<sup>11</sup>。チンギス・カンをもンゴル民族精神の象徴とし、チンギス・カンによってモンゴル民族を統合するという当時の日本の占領政策が現在に至ってもなお力を発揮している。「神の如きチンギス・カン」はモンゴル民族精神の発揚に多いに機能したと思われる。

また、モンゴルの日本征服を「東征の失敗」という項目で次のように記していた。

アジア大陸の大部分を攻め取ったモンゴルは次には海を渡って東方の日本を征服しようとした。クビライには島國の日本が昔からどんなに強い国であるかが全くわからなかったので無理にも降服させようと度々使を送って降服をすすめたが、日本はきっぱりとこれを斥けた。そこでクビライは將軍に命じて1273 九百艘の戦艦を以て日本にせめよせたがにわかに大風が起って戦艦は沈み兵士は海に溺れ大敗して帰国した。それでもクビライは東征の考をすてず、宋を滅したのち、1281 年には更に大軍を以て日本攻撃を行ったが、勇敢な日本武士は奮戦して、モンゴル軍を非常に苦しめた。その上不思議にもまたまた大風が激しく吹き荒れたのでモンゴルの戦艦は殆んど海に沈み、兵士の大部分も流されてしまった。チンギス・カン以来連戦連勝一度も負けたことのないモンゴル軍も日本遠征では初めてひどい失敗をしたのである。クビライは、もうこの上日本に攻め込もうとは考えぬようになった。

連戦連勝一度も負けたことのないモンゴル軍だったが、日本には勝てなかったという文脈である。「元寇」というモンゴル人が好まなかった表現は避けたものの、日本の優位性、指導的立場を保つという文脈構造になっていたと考える。

第13章と第14章では満洲族が支那を占領することができたのは全くモンゴルのおかげであったことを強調し、清はモンゴルをどのように治めたか、モンゴルがいつに中国に植民地化されたかなどの問題が描かれていた。清がモンゴルを弱くした方法として盟・旗の制度、年班、仏教を盛にす、モンゴルと支那人とを分つという4点から分析していた。まずは盟・旗の制度について、清は盟や旗を作ってモンゴルの諸部をなるべく小さく分けようとしたことを上げていた。ウブル・モンゴルを60旗、カルカ・モンゴルを121旗に分け旗と旗との間にオボを積んで境とした。いくつかの旗が集まって盟となるが、その数はウブル・モンゴルに6盟、カルカ・モンゴルに7盟合わせて13盟とした。我々モンゴル族は昔から広々とした内外モンゴルの地を自由に遊牧していたがこの時よりせまい旗の中に押し込められ、旗の外へ出ると罰を受け

ることになったため、昔の勇敢な気風は次第になくなっていったとした。

次は年班制度についてである。年班とはモンゴルの王公が順番に清の都の北京に行って、皇帝に会うことを指すが、北京に来た王公たちは見るもの聞くものも珍しいものばかりなので、それに心を奪われ次第に贅沢な生活をして金を多く使うようになったという。そのため、王公たちも勇敢な気風を失い、支那人のように弱くなってしまったとした。

清は仏教をすすめ、これを広めようとし、多くの廟を造らせ、モンゴルの男子は家を継ぐ者の外の多くをラマ（僧侶）にしたため、ラマの数が非常に多くなり、一つの廟に数百、数千の僧がいるようになったとした。廟が増え、ラマが多くなればそれだけで金が多くなるため、モンゴルの王公は武をおさめることができなくなった。その上モンゴル全体の元気も非常に衰えるようになったと分析していた。

最後はモンゴル人と支那人とを近づけないようにしたことについてであるが、清は北のモンゴル人と南の支那人が一緒になれば国が危ないと考え、支那人がモンゴルの地に入ることを固く禁じていたという。初めは商売のためでも支那人はモンゴルの地に行くことができなかったが、清の中頃ロシア人がシベリアを占領し進んでモンゴルを取ろうとしたので支那兵をモンゴルに置くことにした。清末頃には平和なモンゴルをさして、支那人が洪水のようにおしよせ、シラ・ムーレンを超えて遠くカルカ方面へも移住しその数は数10万の多きに及ぶようになったという。また、支那人の脅威を次のように問いかけていた。

支那人は昔から戦争に弱いから我々初めは支那人が移住しても大して心配しなかったが、支那人が人を騙すことが上手で金もうけのためにはずいとも平気であることを知らなかった。そこでモンゴルの人々は知らず知らずの間に大切なものを奪われるようになってしまった。（略）支那人のために家畜と土地を奪われてしまつては我々には哀れな生活におちいるほかにはなかった。清の時代にはモンゴルは大変弱くなったとはいえ、モンゴルの地は我々のものであった。それが今では悪い支那人の力の方が強くなってしまったのである。（略）こんな有様は戦争で負けるよりもっと悲しいことである。この有様がこの上永く続いていけば我々民族の前途はどうなるのであろうか。

第15章ではロシアのモンゴルへの影響力を強めていく有様が描かれていた。北から来たロシア人は南から来た支那人よりもっと恐ろしい敵であったと位置づけしていた。ロシア人は永くキブチャク・カン国の支配に服していたが、1480年にそれを滅して独立してからはコサック人を手先に、東へ東へと土地を広め清の初めごろにはシベリアを占領し、モンゴル族の一部であるブリヤート人を降ろしてしまった。清の中頃には進んでカルカや満洲にも侵入しようと、国境を越えて南に手をのぼし始めたことと記述し、蒙古人民共和國を手先として恐ろしい赤化の手を満洲國と内蒙古に伸ばそうとしているとした。

第16章ではモンゴル民族の覚悟と日本との関係が記述されていた。我々モンゴル民族ほどはなやかな歴史を持っている民族はないとした上で、それが今日ではどうであろうかと問いかけていた。南からは支那人の侵入を受け、北からはソビエト・ロシアが魔の手をのぼし、我々民族は滅亡の淵に追い込まれてしまったとした。今、我々がしっかり覚悟を定めてこれを盛んにしなければやがて滅んで地球上からその姿を消すようになるかもしれないとした。その上、にわかに独力で立ち上がることはたいいできないことであるため、誰を味方として、誰の助けを借りて民族の再興をはかるべきであろうかと問いかけてから日本との関係

について次のように記述していた。

日本は満洲族の救の神であつたが、我々モンゴル民族の上にも必ず温かい助けを与えてくれるであらう。その昔クビライが日本を攻めた時にも日本はモンゴルを永く怨みはしなかった。その後モンゴルが明を盛んに苦しめていた時にも日本は我々に応じて東から明を攻めてくれた。モンゴル民族と日本人とは祖先を同うする兄弟民族であり、その言葉も体質も性格も非常によく似ている。今や世界で最も威を振っているのはアメリカ、イギリス、フランス、ドイツのようなヨーロッパ民族であり、アジアに於いて彼らに負けないような強国は日本あるのみである。この日本と結び、満洲國と手を取り合つてこそ、初めて我々モンゴル民族は昔のような強い國となることのできるのである。三國力を合わせて横暴なヨーロッパ民族を抑え、アジア民族の名誉を高めることが今後における我らの使命である。

日本はモンゴルを助けてくれる仲良しの国で、モンゴル民族と日本人とは祖先を同うする兄弟民族という民族同源論まで登場し親日思想の啓蒙を図ろうとしていた。しかし、南からは支那人の侵入を受け、北からはソビエト・ロシアが魔の手をのぼし、我々モンゴル民族は滅亡の淵に追い込まれそうな状態でありながら、横暴なヨーロッパ民族を抑え、アジア民族の名誉を高めることを今後の使命とするという結論には、日本の占領政策を押し付けの側面が読み取れる。

ここまで『蒙古國史』という教材の主な内容を概観してきた。モンゴルと中国との関係を軸に、モンゴルの古事記ともいふべき『蒙古秘史』の記述も取り入れつつ、モンゴル民族の起源から興隆、盛衰の歴史をまとめ、モンゴル民族精神の高揚を志向していた。モンゴル人の民族精神の発揚が「蒙古民族運動の本質に鑑みて、近代的科学文化は日本に仰ぎ、精神はあくまで蒙古的でなければならない。」<sup>12</sup>という日本のモンゴル人への歴史教育観によるものであつただろう。『蒙古國史』による日本のモンゴル人に対する歴史教育は主に以下の三つの特徴があつた。第一はモンゴルの昔の強さをアピールすることで、モンゴルの民族精神の発揚を図っていたことである。第二は漢人と少数民族の対立構図の中で漢化のような民族の危機を強調していたことである。第三は昔の強さと対比し、現在のモンゴル民族が弱くなった原因を分析し、それを克服する方法として日本を頼りにするしかないという内容構造になっていたことである。史実よりも占領政策の意図のほうが重視された歴史教育であつたと言える。以下では日本のほかの植民地の歴史教育と比較することによって、日本のモンゴル人に対する歴史教育をもう一步進んで検討してみることにする。

#### 四 南洋群島の歴史教育との比較

日本の蒙疆政権におけるモンゴル人に対する歴史教育は日本のほかの植民地、特に間接統治となつていた南洋群島の歴史教育とも一線を画すものだった。南洋群島では本科4年に補習科2年という最長6年間の教育が実施されていた。南洋群島においては国語以外の科目の教科書は作られておらず、国語読本のなかに「歴史的教材」「地理的教材」「理科的教材」などが含まれていた。それに比べると、日本の蒙疆政権のモンゴル人に対する歴史教育は自民族の歴史をシステムの教え、その内容にも日本的要素が少なく、「しっかりしていた」と言えよう。

南洋群島を占領した当初の日本の島民教育は、試験的に日本語及び算術、唱歌等を教えたもので、教科書等を使用することなく、国語は片仮名を主として日常必要な言語を教え、算術、唱歌も簡単なものを適宜教えたにすぎなかった<sup>13</sup>。1915年12月に南洋群島小学校規則が發布されても、どんなことをどの程度に教えるかは教師各自の識見による外なかった。1916年に島民子弟を教育する小学校の教科書として国語読本の編纂に着手し、1937年まで四回に渡る国語読本の改版編纂が行われた。その過程でも国語教授を以て各科を統合する主義を徹底した。1927年の南洋庁南洋群島国語読本修正趣旨書（本科用）の中で、「島民児童ノ心理を考慮し、日常生活に触るるものに始り、農芸趣味を涵養し、郷土の資料を加え、漸く進みては家事、地理、歴史、公民に関するものを探り、併せて日本の国情、世界の事情を知らしむるものを選びたり」と歴史教育の要素を加えることが初めて明示された。この趣旨書に基づく国語読本の改訂を加え出版されたのが第三次国語読本で、1933年3月のことだった。本科用と補習科用の国語読本の中に歴史的教材として指定された課は以下のものがあつた。

表② 1933年南洋群島の国語読本における歴史的教材

巻二	ウシワカマル、ハナサカジジイ、大江山
巻三	うらしま太郎、はごろも
巻四	白ウサギ、扉のまき、ふじのまきがり、曾我兄弟
巻五	天の岩屋、大蛇たいじ、熊襲征伐、仁徳天皇、八幡太郎、天の川
巻六	弓流し、萬じゆ姫、神風、千早城、水兵の母
補習科巻三	リンカーンの苦学、ニュートン
補習科巻四	トマス・エジソン

全体的見ると、表②の歴史的教材には日本の伝統的な物語が多く、「仁徳天皇」のような皇国史観と「水兵の母」のように天皇のために従軍と言った日本式國民道德教育が志向されていたと言えよう。教材の具体的な内容がいかなるものだったのか、国語読本補習科用巻一（1937年出版）の「神風」を事例に詳しく見てみよう。

今から七百年ばかり前、支那に元とゆう強い国があつた。だんだん四方の国をしがえて、後には、世界の国々をせめ取ってしまおうとした。それでどうかして、日本をもしたがえたいと思い、たびたび使をよこして、たいへんぶれいなことを言ってきた。日本では、元の使がくるたびに、それをおいかえた。それでもたびたびくるので、後にはきってしまった。元はたいへんおこつて、十何万の兵を船にのせて、日本の博多にせめよせて来た。博多の沖は、見わたすかぎり、元の船でいっぱいになった。日本の武士は、博多の濱に集まつた。元の兵は、一人も上陸させぬとゆういきごみで、濱べに石がきをきずいてまもつた。日本の武士は、敵のせめよせるのを待ちきれず、こちらからおしよせた。敵は、高いやぐらのある大船、こちらは、釣船のような小舟であつた。けれども、日本の武士は少しもおそれなかつた。中には、敵の船におしよせ、帆柱をたおして、はしごとし、敵の船へおどりこんでその大将をいけどりにしてひき上げたものもあつた。敵は、このいきおいにおそれて、鉄のくさりで

船をつなぎあわせた。まるで、大きな島が出来たようだ。それでも日本の武士は、後から後からと攻め寄せるので、敵は一まず沖の方へしりぞいたが、にげてしまったのではない。又おしよせてくるのはあきらかであった。わが日本にとっては、じつにたいへんな時であった。おそれ多くも、亀山上皇は、御身をもって国難にかわろうと、伊勢神宮においのりあそばされた。武士とゆう武士は、必死のかくごで敵をふせいだ。百姓は、一生けんめいで、ひょうろうをはこんだ。まったく、上下のものが心を一にして、国をまもったのである。このまごころが、神の御心になかったのであろう、一夜、大暴風雨がおこって、海がわきかえった。日本の武士は、「それ神風だ」とばかり、日本刀をふりかざして、敵をきりまくった。敵の船は、こっぴみじんにくだけて、敵兵は、海の上にしずんでしまった。いきて帰ったものは、かぞえるほどしかなかったとゆう。それ以来、日本は一度も外国にせめられたことがない。

『蒙古国史』における「東征の失敗」と南洋群島の歴史的教材として登場する「神風」は同じことを指している。「神風」は有高巖によって言及され、当時の日本の歴史教科書において必ず出てくる内容だった。「上下一致の奮闘」「神国の自覚」という国民的自覚を振起させる狙いがあったが、その狙いが南洋群島まで広がっていたことが分かる。このように南洋群島の歴史教育においては日本的要素が多く含まれていた。朝鮮総督府の国語読本を編纂し、文部省当局の依頼を受け、1925年の南洋群島の第二次国語読本の編纂を依頼された芦田恵之助は当時の心境を次のように記述していた。

「朝鮮はかつて我が先進国であり、歴史を有する独立国であり、千七百万という大集団の民族である等々の事情から、材料の選択について苦心する所多かったのですが、南洋群島の国語読本は、この点に於いて甚だ心安さを感じました。

朝鮮に比べ、南洋群島は人口が少なく、歴史を有する独立国ではないという認識があったことが理解できる。共通語の必要性から日本語教育を施し、その日本語教育に少しずつ日本文化的要素を含む歴史的教材を加えるといった日本の島民教育から日本の南洋群島に対する占領戦略上の軽視が見られる。また、「島民の性情を知ること極めて浅く、内地に比して環境の甚だしく異なる島民が果たして何を要求して居るかを想像し難いこと」、「島民の生活範囲から選択しようという材料について、編者に十分の知識がない」といった日本の南洋群島に対する研究や知識の不足があったことも考えられる。

これに比べ、戦前の日本のモンゴル史研究は少数の一部の研究者とは言え、かなりのレベルに到達していた。白鳥庫吉、矢野仁一といった東洋学専門の研究者を始め、善隣協会蒙古研究所の若手研究者の青木富太郎を中心に、モンゴルや中国の史書などの書籍におけるモンゴルに関する記述が綿密に調べられ、体系的に翻訳され日本に紹介されていた。矢野仁一の『近代蒙古史研究』、白鳥庫吉の『音譯蒙文元朝秘史』がその典型である。また、青木富太郎の世界歴史第5巻となる『東亞諸民族の盛衰』、『蒙古の民族と歴史』、『動く蒙古』などにモンゴルの古代から1930年代までの歴史や社会全般にわたる紹介が含まれていた。特に、矢野仁一の「蒙古の過去と將來（蒙疆專號）」における主張が『蒙古国史』の内容そのものと言っていいほど似ていた。また、矢野仁一の『近代蒙古史研究』においても、モンゴ



ルは中国（支那）の一部ではないことをモンゴル各部の事例で分析し、モンゴル独立の正当性を主張していた。『蒙古國史』の著者は善隣協会のみを記載し、編集者などが不明であるが、矢野仁一など東洋学における研究者の知見を借りた可能性が高いと思われる。

## 五 終わりに

では『蒙古國史』の教授内容が蒙疆政權におけるモンゴル人の歴史認識にいかなる影響を与えたのだろうか。本稿では当時教育を受けたモンゴル人学生たちの教育経験及び内面化した歴史認識について、回想録を用いて分析してみたい。主に以下の4人の記述を分析する。

### ①徐志明<sup>14</sup>（蒙疆学院の歴史教育）

「歴史の授業は、日本はいかに朝鮮と満洲国を支援して国家を作ったかなどの内容で中華民族の悠久な歴史や輝き文化に触れることもなかった。日本人教員は歴史の授業を借りて、モンゴル人は長年漢人に圧迫され、日本人がモンゴル人を支援して漢人の圧迫から解放し、独立させるために出兵してきたのだと鼓吹しモンゴル人と漢人の肉身関係をけしかけ、蒙漢各民族ともに作り上げた祖国の歴史を抹消しようとした」

### ②金巴扎布<sup>15</sup>（蒙古中学校の歴史教育）

「私は蒙古中学で蒙古語、日本語を学んだだけではなく、中国以外の世界と人類の歴史を知り、視野を広げることができた。特にモンゴル人教師苏仁道尔计先生の蒙古歴史の授業を通じて、私の民族感情が芽生え、自分の祖先の偉大さと現在蒙古族が直面している困難を知り、民族復興のために何かやりたいと思っていた」という。同じく蒙古中学校に学んだ趙真北（額爾敦扎布）も次のように回想していた。「徳王は日本と協力し防共方針を徹底したが、彼の民族教育に対する熱心と貢献したことは評価すべきだと思う。当時、徳王の「蒙古復興」の思想は各種行事や活動を通してその雰囲気を作りあげられた。例えば、チンギス・カン元号を使い、チンギス・カンの写真を飾る、チンギス・カン出征歌を歌い、チンギス・カンの映画を見せる、毎年チンギス・カン誕生祭を行い、運動会応援団の言葉は「頑張れ、頑張れ、チンギス・カンの子孫であった」という。歴史の授業はチンギス・カンの偉大なる業績を謳歌し、帽子には蒙古のモンゴル文字が印字され、モンゴル学校に全て「興蒙」をつけるなどしていた。この雰囲気に薫陶された学生たちは蒙古民族意識が強く、いつも蒙古民族衰弱の原因や復興の方法を討論していた。」

### ③楊達頼<sup>16</sup>（包頭蒙古中学校の歴史教育）

「私はこの学校で小学2年、中学3年全部で5年間在籍した。省みると私は包頭蒙古中学校で主に以下の二点において成長したと思われる。一つは文化知識を身につけ視野を広げたこと、もう一つは漠然とした民族意識を感じ取ったことである。当時、「蒙古復興」は流行語となり、いかなる方法でどのような蒙古の復興なのか私にはよくわからなかったが、その言葉には陶醉していた。当時、日本人が書いた『五十年後の蒙古民族』という本が流行り、五十年後モンゴル人を「大和民族」に同化させるという日本の鼓吹に反感と怒りを感じていた、このように言葉には表現できない心の動きはたぶん民族意識として働いていただろう。」

### ④沙金格日勒<sup>17</sup>（包頭蒙古中学校の歴史教育）

「国民党による長年の民族圧迫政策により、少数民族と漢族の間に相当程度の矛盾があった。学校で

はいつも日本人とモンゴル人は親戚であることを強調し、感情的に日本統治を受け入れさせようとした。私はこのような嘘話をすっかり信じていた。モンゴル人教師はあらゆる方法を講じて、我らの民族意識を育てようとした、いつも「チンギス・カン出征歌」を歌い、「阿兰豁阿折箭训子」の物語でモンゴル人の団結を呼びかけていた。日本人先生のフォローと蒙疆政権を後ろ盾に、私たちは校外で漢族の学生と殴り合いの喧嘩をした場合いつも勝っていた」

このように学生たちが語る自分の祖先の偉大さ、現在のモンゴル人が直面している民族の危機とはいかなるものだったのだろうか。自分の祖先の偉大さとはモンゴルの名誉となる偉大な歴史のことで、民族の危機とは漢化やロシア、日本による植民地化の危機のことを指していたと思われる。これらの回想録から学生らは『蒙古國史』の教授内容とほぼ一致する歴史認識を持っていたことが言える。『蒙古國史』第16章に関するモンゴル民族の覚悟に関して、『蒙古國史』の姉妹編とも言える読み物の『五十年後の蒙古民族』が1940年に出版された。東京振武学校でモンゴル人留学生の教育指導に携わり、後に満洲國蒙政部におけるモンゴル人向けの教科書の編集出版にも携わった岸田蒨夫によるもので蒙古青年訓の性格が強かった。モンゴルの近代化が進み、教育、商業などが日本のように発展した様子が描かれ、モンゴル青少年に奮闘努力の方向と希望を与えることを目的としたものだった。

楊達頼が指摘したように、蒙古復興は流行語となり、いかなる方法でどのような蒙古の復興なのか私にはよくわからなかったが、その言葉には陶醉していたという形で学生たちに影響を与えていたことが分かる。

また、日本のモンゴル人に対する歴史教育は、宗教や生活習慣の違いに由来する漢人とモンゴル人の違いを利用して、漢人を牽制する民族分断政策<sup>18</sup>を推し進めた実態が読み取れる。それに、日本人による歴史教育には学生が不信感を募らせていたが、モンゴル人先生によるモンゴルの歴史の時間はモンゴル民族精神の発揚に力を発揮していた実態も読み取れる。『蒙古國史』は当時の状況においてどのように使われ、当時のモンゴル人は自分の民族の歴史をどのように認識していたのか課題は山積しているが、今後の課題としたい。

## 注

- 1 楊海英『最後の馬賊：「帝国」日本の將軍・李守信』、講談社、2018年8月、2頁。
- 2 帝国日本のコントロール下にあった地域と時期を表す概念として使う。
- 3 財吉拉胡「近代日本の内モンゴル医療衛生事業：財団法人善隣協会の医療衛生活動」、『哲学・科学史論叢』(14)、2012年1月、102頁。
- 4 『善隣協会関係雑件』第1巻。レファレンスコード：B05015955500。
- 5 前掲、「近代日本の内モンゴル医療衛生事業：財団法人善隣協会の医療衛生活動」、102頁。
- 6 萩原 真美「占領初期沖縄における歴史教育の志向性：—『沖縄歴史参考資料』を手がかりに—」『日本の教育史学』(58)、2015年、58-70頁。
- 7 「蒙疆建設の基本原則と其現況」『蒙疆関係政策文書』、1940年2月。レファレンス：B02030528100。
- 8 宇野善藏「蒙疆教育概況」『東亜同文書院大学東亜調査報告書』昭和14年度、1940年。
- 9 『蒙古』7(2)、1940年。

- 10 前掲「昭和12年2月善隣協会の新事業計画に関する件」『善隣協会関係雑件』第1巻。
- 11 田中剛「「モンゴル復興」運動の研究：中華民国期の内モンゴルにおける民族統合とチンギス・ハーン」神戸大学博士論文2008年3月。
- 12 『露西亞月報』48-59号、1938年。レファレンス：B10070644900。
- 13 南洋群島教育会編『南洋群島教育史』、南洋群島教育会、1938年10月。
- 14 徐志明「蒙疆学院略述」『内蒙古文史資料』第29輯。1987年、81-83頁。
- 15 金巴扎布「半个世纪前的厚和蒙古中学」『求学岁月蒙古学院 蒙古中学忆往』、呼和浩特文史資料(13)、2000年12月、35-37頁。
- 16 杨达赖「流失的岁月」前掲『求学岁月蒙古学院 蒙古中学忆往』、136-140頁。
- 17 沙金格日勒「不堪回首的往事」前掲『求学岁月蒙古学院 蒙古中学忆往』、149-152頁。
- 18 新保敦子著『日本占領下の中国ムスリム—華北および蒙疆における民族政策と女子教育』、早稲田大学学術叢書、2018年10月。蒙疆政権におけるムスリクとモンゴルはともに少数民族として同じ立場だったため、本稿では新保の知見をそのまま引用しモンゴル人教育事情を説明することにした。